

初心忘るべからず

謡曲を習っていることから、世阿弥の能についての講演など聞くことが時々ある。彼は室町時代初期に活躍した能役者だ。父、観阿弥の長男として生まれた。生涯分かっていただけでも五十作以上の作品を書いている。父や関係のあった貴族たちから色々な教養を授けられた。

十二歳の時、京都今能神社で父と共に能を舞い、臨席していた將軍足利義満の寵愛を受けるようになる。

少年時代の世阿弥は大変な美少年だったと言われている。能を作ることと並んで、代表作である「風姿花伝」や「花鏡」を書いている。内容は能役者の子供から老人に至るまで、人生の生き方や芸能の世界に生きる者にとって何が必要かを説いたものである。稽古の積み方や年の重ね方が具体的に書かれている。

「花」と言う言葉は、世阿弥の能楽論で使った言葉の中で現在でも最もよく使われる。「あの役者には花がある」など。花と言えば季節が変わって色々の花が咲く。その花は珍しく人々も喜ぶ。人にとって珍しく新しいものである。能楽師は、能を見て「今日はちがうな」と思わせることが役割だと言っている。

彼は「初心」と言う言葉も書いている。「初心忘るべからず」世阿弥は人生の中にいくつもの初心があると書いている。若い時の初心。人生時々の初心。老後の初心。これを忘れてはならない。子供時代の可愛らしさ。

青春時代の声変わりなど。二十四、五歳は成人として声も落ち着き周りからほめられたり、天才だと言われたり、名人が登場したと言われのほせ上がったたりする。その時が初心である。未熟さに気づきもつと自分を磨き上げなければならぬ。「まことの花」でない。またその後にも初心が来ると言う。三十代半ばが頂点だと言う。

最後に老いて初心が来る。老いてこそふさわしい芸がある。それに挑むべきである。彼は父の晩年の舞台を見「老木に残る花」を見たと言っている。彼が言う初心

和歌山市にお住まいのWさんが投稿してくださいましたので、ご紹介いたします

とは、今まで体験したことない新しい事態に対応する方法、又試練を乗り越えていく時の心構えだと言う。年を重ねていくと生理的に限界を迎えざるを得ない。その限界の中でどうやって乗り越えて、なお花を咲かせるか。彼が言うには「老いに向かっている人生の中で、その時々工夫をし、どう生きていくかを考えよ」と言っている。

七歳頃・・・子供の心のおもむくままにさせる。自

発性を尊重。

十二、三歳・・・少年期の美しさが表れてくる。姿だけ

でも幽玄である。基本を大切に。

十七、八歳・・・人生で最初の関門。声変わり。自分の

限界の中で無理をしない。意志による

選択の転機。

二十四、五歳・・・一人前になり、芸も上手になる。その

勢いに慢心しない。初心である。

三十代後半・・・能の絶頂期である。

四十歳過ぎ・・・下るばかり。人生を振り返り今後の進

む道を考える。

四十四、五歳・・・花が失せる。得意なものを極める。

五十有余歳・・・動きが控えめでも花が咲く様に見える。

老木に残り花である。

能役者の考えによるものであるが、私たちの人生にも言えるように思う。その年代年代に花があり、初心があると思う。私も今年七十五歳を迎えた。後期高齢者の保険証が送られてきた。あゝあ、と思ったが思い直した。この年代ならではの初心を持ち、あせらずゆっくり生活をして年老いた花を咲かせようと思っている。

世阿弥の言葉の中で私の一番好きな言葉「悪い時というものは、良い時への準備期間である。信じていれば必ずいいことがある。すなわち希望である。」また、謡曲を習っていて良かったなと思うことがある。複式呼吸によって体中の血の流れが良い。謡をうたい始めると、体中熱くなり冬でも汗ばむことがある。大きい声を出すことによりストレスはどこかへ飛び散ってしまうような気がする。などなどとても健康に良いと思ってる。次のようなことも教わった。謡曲十五徳という。

- 一、行かずして名所を知る
- 一、旅に在りては知人を得る
- 一、考えずして古事を知る
- 一、習わずして歌道を識る
- 一、うたわずして華月を望む
- 一、友なくして閑居を慰む
- 一、望まざして高位に交る
- 一、思わずして養生にかなう
- 一、薬なくして鬱気を散じる
- 一、契らずして美人をいだく
- 一、馴れずして武芸に近づく
- 一、戦わずして戦場を知る
- 一、祈らずして神徳を知る
- 一、接せずして仏道を得る

Wさん、どうもありがとうございました。
1つの事を極めるという事は、内にこもっているよ
うでいて、実は際限なく世界が広がっていく事
なのかもしれません。

謡本を読み謡っているとこのような十五の徳を得ることができると伝えられている。何十年も習っていると本当にこれは感じられる。今では続けていて良かったなど心より思っている。足腰が弱って外出もできなくなっても謡曲の本があれば一生楽しめると思っ
て今も頑張っている。七十五歳の初心にて、老木に花を咲かせてみたい。